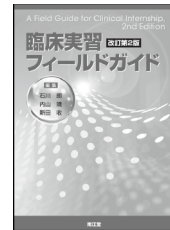


石川 朗, 内山 靖, 新田 収 (編)

臨床実習フィールドガイド (改訂第2版)

菊 池 恵美子

(帝京平成大学, 作業療法士)



良くも悪くも、世の中の急激な変化に反比例するがごとく旧態依然として変わらないものが理学療法・作業療法の臨床実習かもしれない。

いささか古い話で恐縮だが、かれこれ30年以上前、まだ東京都立府中リハビリテーション専門学校が存在していたころ、当時の学生から「インターン（そのころはそう言っていた）用の疾患別マニュアルをつくってほしい」とよく言われたものである。その対応として、手書きでマニュアルまがいのものを作成したところ、実習指導者からは、マニュアルがあると学生はどのケース（当時のクライアントの呼称）にも同じゴールと同じ計画を立てる、と苦情を言われたものである。

今回、『臨床実習フィールドガイド (改訂第2版)』の書評執筆を機に、あらためて本書を手元にある2冊の類書と読み比べてみた。1冊は山口 昇著『作業療法臨床実習マニュアル—指導者と学生のために』（三輪書店, 2013）、もう1冊は拙編『OT 臨床実習ルートマップ』（メジカルビュー社, 2011）

である。これら3冊の違いは何かを明確にすることが、すなわち本書の書評になるのだと思う。

本書の特徴は、徹底して学生に向けて書かれていることである。他の2冊が実習指導者にも、いやむしろ指導者にこそ読んでほしいとの想いが強く感じられるのに対し、本書のターゲットは学生、実習生自身への直球勝負である。言い換えれば、これから実習に出ようとする学生に、医学的「臨床思考過程」を身につけるための知識と医療技術を伝授するものといえよう。

本書は序章から第6章までで構成されている。序章は基本的事項であり、初版が踏襲されているが、よりよい臨床実習を進めるために目標をもって実習に臨むことの重要性と、本書のポイントである臨床思考過程の流れが詳述されている。第1章から第3章までは初版同様、「神経系」、「運動器系」、「呼吸・循環・代謝系」について、処方箋を手にしたら実習生はまず何をどうすればよいか、その手順と評価法が丁寧に説明されている。理論的背景はICF（国際生活機能

分類）に基づいている。第4章と第5章には、改訂を機に作業療法の対象となる「発達障害」、および「認知症・精神障害」が加えられ、高次脳機能障害の説明も充実している。第6章「がん・熱傷」は、初版にも取り入れられているが、さらに詳述した内容となっている。

ところで、本書には、上記の他に memo 一覧とアドバイス一覧がある。memo は専門用語ではなくむしろ平易な言葉で書かれており、学生にはここを先に読むことを勧めたい。アドバイス一覧は臨床実習を乗り切るためのノウハウであり、うまく活用することである。

半世紀を超えてあまり変わらない理学療法・作業療法の臨床実習に風穴を開けるために、多様なマニュアル本があったほうがいい。誰かがどれかで触発されればいいのだから。

A5 判 542 頁 5,500 円 + 税
南江堂 刊
☎ 03-3811-7239